

「地域から現代社会を考える」

本年度から本学の教養科目に「テーマ科目」が新設された。いわゆる教養改革の一環であり、各学部から教員が参加してテーマに即して講義を行うものである。どのようなテーマにするか迷ったが、「地域から現代社会を考える」という大きなテーマを設定した。受講登録者はほぼ全学部から 104 名であり、私なりに熱っぽく講義している。

最初はホットな話題から地域に興味をもってもらうために、いま話題の市町村合併、そして公共事業をめぐる問題から講義をすすめた。両者とも学生の関心は高いものがあった。市町村合併については、学生の出身地などで合併が推進されている地域ほど関心が高い。公共事業については、なぜ無駄な事業が繰り返されるのか、公共事業見直しの動き、長野県栄村などの「実践」などに注目が集まった。

次いで経済社会の流れと関連づけて、地域から現代日本の諸相の点検をはじめている。講義では毎回のように映像を使って問題にアプローチし、簡単なコメントを書いてもらっている。学生がどのように反応したか、どこに興味をもったかを把握でき、それを読むのが楽しみだ。今日の講義では、戦後の高度成長から石油ショックまでを扱ったニュースを素材にコメントを求めた。なかなか興味深いコメントが多かった。

戦後日本が駆け足で高度成長を遂げたこと、現在の低迷する経済社会との落差に関心が高かった。空前の成長の一方で、深刻な公害や都市問題などのひずみにも目が向けられていた。それと「大学紛争」の映像に驚きをもったようだ。なぜ「紛争」が生じたのか、学生たちの激しい動きを理解できないようであった。確かにキャンパスの現在を見ていると、当時のような動きは理解できないであろう。

73年の第1次石油ショックの映像にも関心が向けられていた。私にとっては、石油ショックの記憶が生々しく残っているが、学生たちにとっては生まれる前の「できごと」なのだ。なぜトイレットペーパーが値上がりしたのか、主婦たちが「買いだめ」に走ったのか、物不足と「狂乱物価」による一種のパニック状態が想像できないようだ。現在のデフレとは正反対の現象に戸惑いがみられた。もう一つ70年の大阪万博の映像にも注目が集まり、2005年開催予定の愛知万博との「時代」の違いを指摘するコメントが多かった。ともかく映像は概して好評(エイゾー)のようで、次回は要望があったバブルからバブル崩壊の時代へと講義をすすめていこう。

(5月29日記)